

# 仔豚が生まれた



岩渕朱実

「もしもし大変、ヤマ農業高校とい  
うところから電話があつたけどどうす  
る?」母の狼狽した声が、ゼミ旅行で  
伊豆に来ていた私の耳もとに響いた。  
この日の昼には、今年初の桜を見てき  
たばかりだった。

それから約一ヶ月後、私は、一面銀  
世界の校庭をにらみつけていた。冬へ  
の逆もどり。とり残されたようでは  
どうみじめな気持ちになつた。私の予  
想していた教師生活の幕開けは、もつ  
と明るく希望に満ちたものであるはず  
だったので、実際には、このように不  
安げでおぼつかないものであった。  
ある五月晴れの日、農場で仔豚が生  
まれた。雪も消え、新緑の萌える季節  
だった。「よし、仔豚を見に行こう  
!」私の突拍子もない提案に二十二名

の乙女らが外へ飛び出した。春が確實  
に到来した喜び、新しい生命の誕生、  
私には、なにもかもがすばらしく感じ  
られた。だが、生まれながらにこの土  
地に育つた彼女らのこの自然がおりな  
ず嘗みへの感動は、極めてクールだっ  
た。

「先生、なにがそんなにうれしいの  
?」などと言つて「臭い臭い」と嫌が  
った生徒も、無心に母豚の乳をむさぼ  
る仔豚の愛らしさに食い入るように見  
入っている。

ところで、この出産に農業科男子生  
徒が、夜を徹して付き添つたというの  
だから驚きである。私にとっては、神  
秘のベールに包まれた推測の世界でし  
かないものを、彼らは一夜にして目撃  
したのである。

保育で恐る恐る教えたことが、ま  
ごとのように思えた。「いや待てよ。  
仔豚の誕生と人間の誕生の違いを教え  
こそ、家庭科なんだ」と思い直す。お  
産の後も生々しく横たわっている母豚  
は、お乳にあぶれた仔豚を、今にも踏  
みつぶしそうだった。

授業が思うようにいかなかつたり、  
人間関係に疲れた時、私はこの仔豚誕  
生の日を思い出す。あの日、冬に耐え  
小鳥についぱまれることなく生き残つ  
た芽は、一斉に生命的躍動を開始して  
いた。ただ、遠く離れた山里では、そ  
れをかすみとしてしか知ることができ  
なかつた。同様に生徒も一見したとこ  
ろ、どんよりかすみがかかつたようにな  
らなかつた。同じく生徒も一見したとこ  
ろ、どんよりかすみがかかつたようにな  
らなかつた。

「別に」というような、とても十代の  
瑞々しい感性とはほど遠いものであ  
る。けれども一人一人と丁寧に向き  
合えば、けつして生氣を失つてはいな  
いことがわかる。仔豚を見つめる目を  
思ひ出したい。一人一人の中には、雪  
に閉ざされた冬に耐えた生き生きとし  
た新芽があり、春の到来を待ち望んで  
いることを信じたい。

今、一番恐れていることは、欲ばり  
のあまりそれがかえつてあきらめに結  
びつてしまふのではないかということ  
である。これから、私の想像を越え  
る雪国の冬が訪れようとしている。こ  
の冬を乗り越えた時、また何かが生ま  
れることを期待したい。